



小説 筑摩十幸

挿絵 亀井

原作 桜沢 大

奴隸
聖徒会長

白カマ

~淫魔に占陵された学園~

第六章 淫獄の少女たち

第七章 相姦受胎

第八章 魔獄へ誘う者たち

第九章 奴隸淫魔ヒカル

登場人物紹介

Characters



いづみ 泉ヒカル

親の形見『鬼太刀』で妖魔と戦う、弟思いの生徒会長。妖魔バルムスに犯され、子種を受胎させられている。



カムイ セイラ・神居

生徒会副会長。実は人と妖魔の血を引く少女シスターで、淫魔ウィルスに感染させられる。

あやつじ 綾辻ユキ

退魔の名門、綾辻家の令嬢。肉調教の末、母乳滴る身体にされてしまった巨乳少女巫女。



アナスタシア

強大な力を秘めた聖マリス学園の学園長で、ゴスロリルックの少女。

しらしことね 白石琴音

生徒会顧問の女教師だが、現在はヴェゼルの手下に墮ちる。

いづみ 泉ショウ

ヒカルの弟でたった一人の肉親。妖魔にさらわれ行方不明に。

バルムス

学園を狙う妖魔。不良生徒、黒沼に取り憑き、ヒカルを孕ませる。

ヴェゼル

学園の教頭に取り憑き、バルムスたちを操って暗躍する妖魔。

死にたいほどの羞恥がなぜか子宮を疼かせ、いつか凶暴なサッキュバスの本能が暴れ出すのではないかと思うと、背筋が凍る思いだ。

「尻が物欲しそうにヒクヒクしているぜ。もつと責めて欲しいんだろう？」

「はあ……はあ……そんなこと……」

ハッキリ否定もできず、弱々しくプロンドを揺するばかり。セピアの蕾もキュッと窄まったり、フツと緩んだりを繰り返して、少女の懊悩を具現しているかのようだ。

「クヒヒ、素直になれる魔法のお薬だ」

傍らの鞆からガラス製の浣腸器をつかみ出す。ズシリと重そうな筒内にはたっぷりと薬液が充填されていた。

「うう……そんなもの……お、おやめなさい……」

睨んで威嚇しようとしても目尻に力がこもらない。突き出したままのお尻も、浣腸責めを待ち望むようにうねってしまう。

「ククク。一リットルあるからたっぷり楽しめるぜ」

狙い澄ました先端がスツと肛門に沈み込む。途端に冷たい氷のような感触が突き刺さり、「ヒィッ」と短い悲鳴が弾ける。そして息つく間も与えず極太のシリンダーが押し込まれ、ドクドクと薬液が直腸に流れ込んできた。

「くっ！ ううああああ——っ！」

堪える間もなく絶叫が迸る。腸粘膜を灼く嵐のような激感。生まれて初めて味わう浣腸責めは、セイラの予想を遙かに超える衝撃だった。

(な、なんですの……これは……?)

痛苦は粘膜にとどまらず、肉に骨に、そして魂にまで響く。とても薬液だけの効果とは思えなかった。あまりの苦しさにセイラの指先は痙攣しながら聖壇を掻きむしった。

「こいつには神聖な聖水が入っている。感染者じゃないなら平気なはずだぜ。ヒヒヒ」

「せ、聖水……ですって……!？」

シスターであるセイラにとつては、聖水を浣腸されるのは屈辱であるに違いない。だが問題は、その聖なる水に対して肉体が拒絶反応を示していることだ。

「くう、ああ……っ！ や、やめなさいっ……聖水をそんなことに使うなんて……神への冒瀆ですわ……うううあああっ！」

「気取るんじゃない。さっさと正体を現しちまいな」

断続的に押し込まれるシリンドラーからビュッビュッと聖水浣腸が進り、腸壁を叩く。苦しいはずなのに、淫魔ウィルスに改造されたアヌスはそれすらも快感として脳内に伝えてくる。

「すごい反応だな。やっぱり感染者なのか？」

「聖水で苦しむなんて、まるで妖魔みたいじゃない」

生徒たちの声にも、明らかに疑惑の色が濃くなっている。

(うう……そんな……わたくしは……)

聖水に苦痛を感じながらも、淫薬を貪ってしまう自分自身に愕然とする。神に見捨てられてしまったような虚無感に襲われ、目の前が暗くなった。

その間にも浣腸液はどんどん注入され、少女の惑乱と官能を燃え立たせるのだ。

「くうあ、ああ……も……もうやめ……アんんっ！」

アヌスを中心に燃えるような熱波がさざ波のように全身に拡がっていく。鳥肌立っていた尻肌がいつしかピンク色に上気し、苦しげな喘ぎの中にもどこか甘い音色が入り混じり始めた。それに呼応して、身体の奥底に封じておいたケダモノじみた衝動が暴れ出す。

(このままでは……ま、ま、まずいですわ……)

それは間違いなく無理矢理植えつけられた淫魔の力だ。どんなに抑えようとしても、暗黒の濁流は暴龍の勢いで肉体を駆け上がってくる。

「キヒヒッ！ どうだ、金髪う。気持ちいいだろうが」

浣腸器は残り三分の一にまで押し込まれ、セイラのお腹は聖水で膨れ上がっていた。

極限の便意と快感が混ざり合い、意識までも混濁させられていく。

(身体が……壊れてしまうう……っ！)

内臓が千切れるほどの苦しみに身悶え、肌という肌に脂汗を滲ませる金髪碧眼のシスタ。その一方でセイラの媚肉は確実に淫らな反応を示していた。

クリトリスはピンピンに尖りきり、まだ触れられてもいない蜜壺もネットリと濃厚な牝蜜を吐き出し続けていた。

「これで最後だ」

木脛がシリンドラーを一気に押しきり、残りすべての聖水が灼熱の塊となってドッと送り込まれた。

「あああああ——ッッ！」

ギクンと背筋を反らせ甲高い悲鳴を迸らせる。

稲妻のような感覚に身体を一直線に貫かれたと思った瞬間、体内で渦巻いていた邪気がお尻のすぐ上に集中した。

シユバアアアアアアアッ！

「ヒイイイッ！ いやあああああつ！ こんなの……だ、だめええええつ！」

激しく痙攣する臀丘から紫色のオーラが竜巻のように立ち上がった。それはすぐさま収束し、細く長い鞭状のモノへと姿を変えた

「あ、あれはなんだっ!？」

「セイラさんのお尻から……何か生えたぞ！」

「ホホホ。おぞましい悪魔の尻尾ね。これこそが淫魔病感染者の証よ！」

どよめく生徒たちに女教師が高らかに告げた。

「あ、あれが……感染者……信じられない」

少年たちは一瞬自分たちの目と耳を疑ったが、セイラのお尻に生えているのはどこからどう見ても尻尾だった。エナメルのお尻の光沢を弾きながらユラユラくねる様子は、それが作り物ではないことを示している。

「感染者だと認める気になったかしら？」

「うう……ちがう！ ち、ちがいますわ！」

「じゃあ、これはなんなんだよ。どこからみても尻尾じゃねえか」

グイグイと引つ張られて人外の魔悦が脊椎を駆け抜ける。それでも必死に首を横に振り、セイラは抵抗を続ける。

「ひいああっ！　そ、そんなもの……つくりものですわっ！　んあああっ！」

「おとぼけか。なかなかしぶといぜ」

「では、助っ人を呼びましょう」

琴音が指を鳴らすと、奥の扉が開いて黒沼昭三しやうそうが姿を現した。成金趣味丸出しの高級スーツに身を包んでいるが、本性である淫蕩で邪悪な空気を隠すことはできない。

「こちらに来るのです、家畜お嬢さま。ヒヒヒッ！」

鎖をグイッと引つ張ると、おかつぱの少女が四つん這いで引きずられてきた。

「ハアハア……セイラ……さん……」

「ユ、ユキ!？」

あまりにも変わり果てた姿にセイラは悲鳴に近い声を上げてしまう。調教の激しさを物語るように巫女服はボロボロに裂け、白い肌があちこち露出している。上品で小振りな鼻には牛がつけるような鼻輪が装着され、鎖はそこに繋がっていた。そして何よりも目立つのは乳房である。巨大化させられた乳房は四つん這いでも床に擦れるほど。乳首は大人の親指ほどの大きさに成長させられ、先端から母乳の滴を滴らせていた。

「あ、あれは綾辻あやつじさんだ……どうなっているんだ」

「まさか綾辻さんまで……ウィルスに？」

学園の顔とも言える生徒会の二人に起こった異常事態に、生徒たちは騒然となる。



「私も元退魔師。初めから妖魔様の愛を受け入れられたわけではない。最初はやっぱり抵抗したのよ。でもその触手妖魔、モネボルの責めには堪えられなかったわ」

「私は……こ、こんなもので……んぐうっ！」

唇に触手がねじ込まれ声を奪われる。硬いゴムのような感触で、不気味な粘液に濡れている。思いきり歯を立てたが効果はなく、逆に妖しげな液体をドブツと喉に撃ち込まれてしまった。

「むぐっ！ んぐく、むふううっ！」

青臭い精液に似た匂いを嗅いだ直後、喉がカアッと灼けた。舌から食道にかけてヒリつくような渴きに襲われ、何かを飲みたくて仕方がなくなる。

「そのモネボルはヒカルさん専用に調整を施してあるの。フッフ、催淫媚毒も効くわよ」
（こ、これは……）

琴音に言われるまでもなく、全身に拡がる淫らな衝動がその効果を物語っている。これまでも様々な媚薬が使われたが、これはそのどれとも違う、段違いの効き目だった。

「う……ううう……むう……ンン……ッ！」

たちまち肌という肌がピンク色に上気し、汗の滴を浮かせていく。口を塞がれたままで呼吸も荒ぶり、小鼻を膨らませて苦しげに喘いだ。他の触手も全身に絡みつき、火照った素肌をまさぐってくる。拘束用以外にも様々な種類の触手を持っているようだ。

タコの足のような吸盤を持つ触手が、襟元から侵入してきた。胸の谷間をぬめり降り、ブラカップを押し下げる。狙われたのは妊娠により膨らみを増した乳房だ。

(む、胸に……!?)

二つの乳房が根元を締め上げるようにして搾られた。生温かく濡れた感触に嫌悪感がこみ上げ、ヒカルは塞がれた唇にくぐもった悲鳴を響かせる。だが何重にも絡みついた拘束触手はピクともせず、無駄に体力を消耗するばかり。

「う、ううっう！ むぐうっ……ンふぁあっ！」

触手の蠢きは見た目の無骨さからは想像がつかないほど巧みだった。ピタリと吸いついた吸盤触手は、ゆっくり掬い上げるように乳房筋を持ち上げ、重量感を堪能したあと、円を描くように下へ戻る。一回また一回とグラインドを繰り返されるたび、乳腺の中に沸々と熱い母乳が湧出^{ゆうしゅつ}してしまふ。乳房全体が熱くなり、乳首が見る間に充血して、紅く勃起させられてしまった。

(あ、あ……お、お乳が……)

知性があるのかもわからない化け物に触られて反応してしまふ自分が情けなく惨めだった。

そんな淫らな妊婦少女にお仕置きするかのよう、別の触手が肩越しに近づいていた。透明な細い触手の先端部分が拡がると、内部にはヤスリのような小さな歯がびっしりと並んでいる。吸引と嘔みつきを同時にこなすヤツメウナギのような凶暴な口吻だ。その吸引触手が乳頭にがっちり吸いついてきた。

「それは搾乳触手ね。お乳の出をよくしてくれるわ」

「うっぐうう……ううっ！」

細かくざらつく牙で甘噛みされて、乳首に鋭痛が走る。そこをさらに吸引されニップルが無惨に変形させられていく。

ジュルルッ……ジュルルルッ！ グチュウウッ！
下品な音を立てて吸いしゃぶられる乳首から母乳が断続的に噴き出し、触手の中に吸い込まれる。

（あ、ああ……胸が……胸があ……）

肺腑に突き刺さる乳悦にヒカルは身悶えた。もちろん痛みもあるのだが、それを遙かに上回る快感感が乳房をいっぱい満たしてくるのだ。

「す、吸うな……んぐう……吸うなあ……あうん」

乳悦は背筋を駆け下り、骨盤を震わせて子宮に届く。母性を激しく揺さぶられ、ヒカルは動揺を隠せない。

「フフフ。気持ちいいでしょう？ 赤ちゃんに吸われたらもつと気持ちよくなれるわよ」

（あ、赤ちゃんに……吸われたら……）

ふと、我が子を抱き授乳する自分の姿が頭に浮かぶ。その幸せそうな光景を思い描くと、恍惚とした気持ちになってくる。

（わ、私何を考えて……妖魔の仔なのに……）

ヒカルの心の隙を突くように、触手群が下半身にも攻め寄せていた。

「んぐう……お、おひり……らめえ……んぐう！」

アヌスには数珠を連ねたような節くれた触手が潜り込んでくる。

グプッ……ジュブッ……グポッ……ズブズブッ!

一つまた一つと押し込まれるたび、括約筋のリングに狂おしいばかりの肉悦が湧き起り、張りのある尻タブがブルブルと震えた。さらに数珠は次第に大きくなっていき、比例するように背徳の肛門快感も膨れ上がっていく。

「すごいでしょう? お尻の孔が捲り返って、ウンチが漏れそうでしょう? でもまだまだこれからよ、ヒカルさん。私が味わった地獄はこんなものじゃないわ」

クジャクの羽根を思わせる長く美しい繊毛を持った細触手が股間に迫っていた。先端は綿棒のように尖って、ある程度の硬さがありそうだが、腔肉を責めるには細すぎるように見える。

(な、何をするつもりなの!?)

少女の動揺を嘲笑うように、羽毛触手はスッとクレヴァスを一撫でしたあと、尿道にぶすりと突き刺さった。

「ひいっ! そこは……あひい……んんっ!」

思いも寄らぬ箇所を責められ、ヒカルは弓なりに身を反らせる。慌てて力を込めても括約筋をもたない尿道には効果がなかった。

ジヨリリ……ジュルル……ズブズブ……。

羽毛触手は美麗な外見とは裏腹に凶悪な性能を秘めていた。灼け串を突き通されたような灼熱感と尿意を爆発的に膨れ上がらせる搔痒感が、窮屈な秘孔の中で燃え上がり、膀胱に延焼する。

「あ、あああ……ぐう……やめえ……んむあああ……ッ！」

自分でも触れたことのない粘膜を襲う優しく柔らかなブラッシング。だがそれは猛烈なくすぐったさと表裏一体で、ヒカルを錯乱させる。

「あつぎい！ ふぐうっ！ あひい……そ、そんなところ……んあああっ！ ラめえっ！ んぐう！」

さらにGスポットの裏側を集中的にくすぐられると凄まじい快感が身体の芯まで痺れさせる。感電したように腰を跳ねさせるが奥深くまで埋め込まれた触手は外れてくれない。

「どう？ 妖魔様の素晴らしさ……ヒカルさんもわかつてくれるでしょ？」

「う、うう……いやいや……んむううっ！」

身体を痙攣させながらも、懸命に触手責めに堪えるヒカル。だが限界まで体力を使いきった肉体に無理矢理送り込まれる快感は拷問に等しい。触手を抜き差しされるたび神経回路がショートして、理性の糸が焼き切れてしまおう。

「強情ね。モネボル、クリちゃんを責めなさい」

「ひっ！」

敏感な神経の芽に、二股の音叉に似た触手が接近する。金属質の二本の棒が共鳴するよな唸りを上げ、超高速の微振動をしていることがわかった。

「一分間に二千回以上の超振動。かなり効くわよ」

他の触手が手術の助手のように左右からラビアをくつろげ、包皮を剥いて肉真珠を剥き出しにする。

「い、いひやあつ！ そんなもの……やめええつ！」

女の子の最もデリケートなところに強力な振動を流すなど、悪魔の発想である。さすがのヒカルも恐怖を抑えきれず、磔の身体を必死に足掻かせるが、拘束はビクともしない。

「いくわよ！」

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィンンンッ！

二本の棒が嘴くちばしとなつて肉芽を扶む。その直後、凄まじい快感が怒濤の津波となつて淫核に突き刺さつた。

「あきやあああああああああああああつ!!!」

獣のような絶叫を迸らせ、ヒカルの身体が激しく痙攣する。衝撃は陰核から恥骨を突き抜け、膀胱を貫いて子宮に突き刺さる。全身の血が波打ち、関節がバラバラになつてしまふ。

「オホホホッ！ いいわあ、その表情。ゾクゾクしちゃう。もつともつと苦しむがいいわ」
昂奮気味の琴音の声に重なるように、超振動が繰り返された。

「ひっ、ひいっ！ あぎひいっ！」

断続的に快美振動を浴びせられるたび、陸に上がった魚のように激しく全身を波打たせる。完全に顎が裏返り、逆さまになった視界が真っ赤な陽炎に溶けていく。

「ああああ——っ！ い、い……イグッ……イクウウッ！」

プッシャアアアアッ！ ジョロロロオオッ！

ついには派手に尿までまき散らして絶頂に追い上げられてしまふ。羽毛触手を埋め込ま

れているせいでオシッコは散水器のように辺り一面に飛散した。

「あらあら、無様ねえ」

失神寸前まで追い込んで、ようやく振動責めは中断された。

「はあはあ……うう……はあはあ……」

ガクリと身体を弛緩させ、大きく喘ぎながら深呼吸を繰り返す。まだ脇の裏に星が散っていて、意識も濃い霧の中を彷徨っているように心許ない。振動を送り込まれたのはほんの数秒だろうが、ゴッソリ体力も気力も削り取られてしまった感じだ。

「うふふ。まだこんなのは序の口よ」

「そ、そんな……う、うあああつ！ んぐううつ！」

無慈悲な触手たちはすぐさま責めを再開してきた。絶頂直後で敏感になっている粘膜を容赦なく責め立て、少しも休む余裕を与えてくれない。

「ひゃめ……んぐぐつ、むぐうつ！ あ、ああむ」

唇を犯す触手は胃にまで達し、そこに催淫媚薬をドクドクと吐き出している。

甘噛みされながら母乳を吸われて母性を刺激される。同時に開発されるアヌスと尿道は、膣に匹敵するほど鋭敏な性感帯へと変えられていく。剥き出しの女芯に撃ち込まれる振動は、稲妻のように心臓を串刺しにして脳幹に突き刺さる。

「あ、ああうう！ あむうおとおおつ！」

様々な拷問触手に全身の性感帯を責め抜かれ、ヒカルはピンク色の肌に夥しい汗を湧かせてのたうち回った。普通の人間なら数秒で発狂しているだろう。だがバルムスに調教さ



その刺激にたまらず、唇を犯していた犬が射精する。

ブシヤアアアアッ！ ドピユドピユウウッ！

大量のカウパーに続いて、灼熱の獣精が巫女少女の唇に迸る。

「んぐっ！ むふううっ！ せ、せいえき……んぶうっ！ おいしい……ごくっごくっ……

…んはあああああつっ!!」

ケダモノの精を美味しそうに喉を鳴らしながら飲み干していくユキ。その淫蕩な気に呑まれたように、乳を犯していた二頭も射精を開始した。

「んはああああん！ お乳に出されてるうっ！ そんな……は、はひいっ！ あ、あついい……あああ〜んッ！」

犬ペニスの脈動、染み入るような熱い獣精、攪拌されるローター。それらすべてを目で見ると感じられる。もはや性器と変わらぬほど敏感な乳管にドクドクと精を注がれ、ユキの精神は絶頂目指して矢のように飛翔していく。

「んあああつ！ お乳が……精液……飲んでますウウッ！ 熱いいっ！」

胸いっばいに拡がる精液の熱さが、魂を揺るがすほど心地よい。乳房の中に射精されるものがこれほど気持ちいいとは信じられなかった。犬の精を飲み込んだ乳房はさらにもう一回り膨らんで、気が狂いそうな乳悦を全身に伝えてくる。それでも母乳を封じられたままのユキは、エクスタシーへの最後の一線を越えられない。

「アオオオンッ！」「ワオオオオン！」

二頭は高らかに吠え、挿入したままクルリと反転した。そのままロッキングで出口を封

じた乳房の中へ延々と射精を続ける。

「まだ、まだあ……ドブドブ出てるう……あつい、あついのおおっ！ あああーん！」
ドクンドクンと犬の精の熱さが双乳に染み込む。そのまま心臓にまで届いて、全身の血が犬の精液に入れ替わってしまっそうだ。

「綾辻の大切なお身体を穢されるのは気持ちいいでしょう。お嬢さま」

「ンあああああつ！ あつ、あつ！ き、気持ち……いい……気持ちいいレすう……綾辻の……か、身体を……穢されるのが……はああん、気持ちいいですう……あああん！」

それはもう本心だった。あまりにも重い当主の身体という重責。生まれてからずっと我が身を縛ってきた鎖から解き放たれ、魂はかつてない解放感と高揚感に舞い上がる。

「綾辻家を捨てて僕に、黒沼家に嫁ぐのじゃ。いいですな、お嬢さま」

「あつ、あああん！ もう……もう綾辻の当主になんてなりません！ ユキは……綾辻家を捨てて……く、黒沼家に……お嫁にいきます……だから、もつと……穢してえ！ もつとお乳の中に射精して……二度と戻れないくらい……メチャクチャにしてえっ！ はああ……もつと……もつと……ユキのオマンコを……綾辻のオマンコを……んあああ……穢してください……あ、あ、あああつ！」

獣の精を嘔きこぼす唇が墮落の快美を求め訴える。それは自分を道具のように扱ってきた綾辻への、父への復讐だったのか。うねるような肩や腰にも濃厚な色気が滲み出し、全身を使って獣と交わる悦びを表現していく。

「ちゃんと黒紅にもお願いするのじゃよ、お嬢さま。今のお嬢さまは犬以下の存在、デカ

パイの牝牛なのじゃからな」

「わ、わたし……牝牛れす……はあはあ……く、黒紅……さ……ま……ああ……黒紅様の……おチンポミルクを……ああ……ユキの……ンああ……デカパイの……め、牝牛のオマンコに……はあ……注ぎ込んでください……ンあああああつ！」

腰が突き出され獣根を奥へ奥へと吸い込むように熱く濡れた膣襞が収縮する。子宮口までもが収縮して、犬に対して浅ましいおねだりをしてしまう。

「ヒヒヒッ。それでいいのです、お嬢さま」

満足そうに嗤った昭三が、黒犬の背をトンと叩く。

「ワンワンワンッ！　ウォオッ！　ウォオオンンッ！」

征服感に酔うように尻尾を立てて一鳴きし、黒紅は子宮の最深部にまで肉槍を押し込んだ。次の瞬間、

ブッシャアアアアッ！　ドバドバドバアアアアッ！　ドブドブドプウウッ！

「あああああ————ッ！！」

他のどの犬よりも熱く激しい射精が、令嬢の子宮に溢れ出し穢し尽くす。灼熱の獣精は当主失格の烙印のように、ユキの魂に二度と消せないであろう汚辱感を刻み込んでいった。白足袋の爪先が何度も反り返りながら痙攣し、汗の滴を飛ばして黒髪がバラバラと乱れ散る。

「ヒヒヒッ！　イかせてやりますぞ、牝牛お嬢さま！」

昭三の合図で胸を犯していたシェパードが飛び退いた。直後に乳頭が内側から盛り上が

「あ、ああ……ああ……あ……ンああ……」

絶頂を繰り返すたび、雪のように白かった肌に禍々しい紋様が浮かび上がっていく。妖しくふしだらな刺青のような模様は、墮落しきった淫魔少女に相応しいモノだった。

「これでお嬢さまは完全に儂のモノ！ これからは黒沼ユキとして生きていくのじゃ！」
「ウォオン！ ワンワンワンッ！」

黒犬と蜘蛛妖魔は勝利の雄叫びを響かせる。それを地獄への葬送曲のように聞きながら、ユキはいまだ終わらぬエクスタシーの波にどこまでも流されていくのだった。

「どうだ金髪、久々に俺のマラをくわえてよお」

聖堂の中、十字架に磔にされたセイラは木脛に犯されていた。

「く……き、気持ち悪い……だけ……ですわ」

セイラは苦しげに喘ぎながら用務員を睨んだ。すでに身体は淫魔化しており、黒いエナメル光沢のボンテージに包まれた肢体は、聖気の影響をもろに受けている。

反攻が失敗してから丸一日ここに拘束され、凌辱され続け、肉体的にはかなりのダメーシだが、氣力を振り絞ってセイラは理性を保ち続けていた。

「身体はサッキュバスになりきったのに、まだ心は墮ちきっていないようだな。やはり墮天使の血ってやつは伊達じゃないな」

最初にウィルスに感染させられたセイラだったが、魔の力に対して抵抗力があったのか。肉体の変化と裏腹に精神まではなかなか屈服しなかった。



喉を反らして快感に堪えるポテ腹少女。重力に引かれてお尻が降り、イボマラを根元までくわえ込まされてしまった。文字通りの串刺し刑で夥しい汗が噴き出し、ポテ腹の上を滑り落ちていく。さらに両手はバルムスの首の後ろで拘束されて、全体重が肛門に食い込んでくるからたまらない。

「どんなに嫌がっても、無理矢理にでも産ませてやるからな」

両側から伸びたバルムスの手指が膣孔に食い込み、そのままグイッと左右に割り広げる。完熟の果物が割れるように濃厚な果汁がこぼれだし、射込まれていた弟のザーメンもドロりと流れ出てくる。

「あ、ああううっ！ そんなに……拡げないで……うううああん！」

左右の人差し指と中指、合計四本がクスコとなつて秘園を暴き拡げていく。繊細な女性器を裂かれるような恐怖で、ヒカルは身を強張らせるが、バルムスは拡張を緩める気配はない。

「もっと拡げないとな。なんだって体重十キロの子供がここから産まれるんだからな」

狂悦に目を輝かせながら、すでに直径五センチに拡張された牝孔をさらに強引に拡げていく。野太い指は万力のように、ゆっくりとだが確実に距離を拡げていく。

「六センチ……七センチ……すごいです、ヒカルさん」

ユキが瞳を輝かせて感嘆の声を上げた。ポッカリ口を開けた膣孔はぬめ光る粘膜を晒し、子宮口まで見て取れる。それらの様子が大画面に映し出され、少年たちも息を呑んで成り行きを見つめた。

「うあ、ああっ……こ、こんないや……ああ……こわい」

自分の身体とは思えないほど掂げられているのに、苦痛はほとんどない。それどころか一ミリまた一ミリと掂げられるたび、痺れるような快感が膣口に湧き起こる。

さらに注ぎ込まれる無数の視線を感じると子宮まで熱く滾ってきた。その火照った子宮を流れ込んだ風にひんやりと撫でられ、自分がいかに身体を開かれましたかを実感させられた。

「グフフ、八センチ……九センチ……もつといけそうだな。さすが淫魔の身体だ」

「あ、ああ……も、もうやめて……やめてえ……く、ンああ……」

それでも八センチを超えた辺りから痛みも混じり出す。生きたまま解剖にかけられるような屈辱だ。しかし淫魔化された媚粘膜はその痛みも快感へと変換してしまう。ゴムチューブのように伸びきった花弁がヒクヒクと痙攣しては、新たな牝蜜を吐き出すのだ。

「これで十センチだ。グフフ。マンコを開かれて感じるとは、呆れた変態女だぜ！ おい、お前たちももつと近くで観てやれ」

バルムスに誘われて最前列にいた十人近い少年たちがステージに上がってくる。ぎらつく視線が美少女の子宮口に殺到した。

「あ、ああ……見られてる……ああ……全部……はあはあ……見られちゃってる……」

息遣いまで感じられるほど近くから見つめられ、露出の快感がゾクリとうなじを這い上がる。呼吸が速くなってくるのは昂奮のせいか、出産が近づいているせいか？

「見られて嬉しいか、ヒカル？ それっ、十二センチだ！」

「アヒイイッ！」

痛みと快感が膣洞を戦慄かせ、頭の中で快美の火花が弾け飛ぶ。引きつるような悲鳴を上げたヒカルの顎がガクンと反り返った。

「あ、ひいん……見ないで……そんな……見られたら……感じちゃうッ！」

ヒカルは視姦と膣の拡張感だけで息もつけないほど追い込まれていく。全開にされた秘肉の奥で、ぬめ光る子宮口が今にも開かんばかりに妖しく蠢いた。

「す、すげえ……あそこから産まれるのか……妊婦ってエロすぎだぜ」

目も眩むような光景を前にして、少年たちは瞬きも忘れて魅入っている。ほんの数週間前まで教室で微笑んでいた快活な美少女が、腹をカエルのように膨らませ、今まさに出産しようとしている……。普段のヒカルを知っているだけにそのギャップが昂奮を誘う。

「これだけ開けば出産準備は完了。もう産みたくて仕方がないって感じですね」

親友の奥底を覗き込んだユキがニイッと牙を見せて微笑む。

「そんな……ユキちゃん……はああ、はああ……私……産みたくないよ……」

「あら、この期に及んでまだそんなこと」

淫魔令嬢はニヤリと嗤うと指で印を結んだ。するとオレンジ色の光が円形の魔法陣になつて、お臍を取り囲むように転写された。

「ヒカルさんをもっと心の底から産みたくなるようにしてあげるんです」

黒いグローブの指先が、下から上に向かってスウッとお腹を撫で上げる。

「ああ、なんなの……これ……うう……ひいっ！ あひいんっ！」

その途端、ヒカルは電気でも流されたように身体を伸び上がらせた。なんとお腹から快感が流れ込んできたのである。予期しない快感責めにヒカルは動転し、信じられないという眼で自分の孕み腹を見つめた。

「そのいやらしく孕んだお腹を性感帯に変えてあげたんです。クリトリスの十倍は感じるはずですよ」

囁きながらポテ腹に頬を擦り寄せて、チュッチュッと甘いキスをするユキ。そのたびに甘美な電流がお腹に流れ、ヒカルはヒイヒイと喉を鳴らす。これまで感じたことがない快感だけに、どうしていいのかわからない。

「その無様なポテ腹でもイケるようになってあげますわ」

セイラも反対側から身を擦り寄せてポテ腹にペロペロと舌を這わせていく。そして自らの尻尾先端を筆のように細く変形させ、その筆尻尾で浅く縦に伸びたお臍をコチヨコチヨとくすぐり始めた。

「ひっ、あひっ！ セイラちゃん……そこはひやめえ……ヒ、ヒううっ！」

お腹の中まで犯されるような感覚にヒカルの頭は跳ね上がった。尻尾からは媚毒も分泌されており、くすぐりたいような快感はお臍から腹腔を貫き、子宮を直撃する。

「ポテ腹で感じるようになれば、何度でも妊娠したいって思うようになるでしょ」

お臍の中心は性器と同等の快楽穴へと造り替えられ、浅く抜き差しされるたび、膣孔を犯されているような錯覚に襲われた。

「そんなあ……あ、ああう……お腹が……はひいん……熱くなって……くるうう……くる

っヒャううう……うあ、あああ……っ！」

これ以上ないほど淫らにされた肉体に翻弄され、ヒカルはあられもない声でヨガリ声をまき散らす。お腹全体がジンジン疼き、もつと舐められたい、もつと強く擦られたいという思いがフツと頭を過り出す。そしてヴァギナと同等の性感帯になったお腹は、やはりヴァギナと同様に精を欲し始めた。

「す、すげええ……ヒカルちゃん……ポテ腹で感じてるぜ……」

「こんなの見たことねえよ……くっ。たまらねえっ！」

あまりの妖艶さに当てられ、何人かの少年はついに限界を迎えたようだ。肉棒を握り締めたままガクガクと腰を震わせている。

「皆さん、ここに……お腹にかけてあげてください。ヒカルさんも悦びます」

それを待っていたようにユキが誘惑の視線を投げかける。

「くうう……！　で、でるっ！　おおおっ！」

「俺も……我慢できねえっ！　ぶっかけてやる」

ドピユッ！　ドピユドピユッ！　ビュルルルッ！　ビチャアッ！

ユキが指さす魔法陣に向かって、次々に白濁の弾丸が命中した。

「そんなのだめ！　あ、ああっ！　あついよ……あうん！　あついい！　ひいいんっ！」

盛り上がった臨月の妊婦腹を埋め尽くすように、白濁粘液がぶっかけられる。へばりつくドドロロの牡精はすぐには垂れ落ちないほど濃厚だ。そしてその熱さがダイレクトに子宮に伝わってきて、ポテ腹の快感を増幅させていく。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ちゅと大人のライトノベル

あとみっく文庫

ATOMIC POCKET NOVELS
NEW RELEASE INFORMATION NEWS

最新刊のお知らせ

全国書店で
好評
発売中

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働：ストリップまで!?
セレブ界も格差社会だ!!

42兆円踏み倒して
やりますわ

借金お嬢 クリス

2



小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁

42兆円返済し
返してやりますわ

借金お嬢 クリス

全国書店で
好評
発売中

セレブな生活を取り戻すために
魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁

